台湾の年中行事と家族

岡崎 幸司

本稿では、中華民国（以下、台湾）の主要年中行事と家族の関わりについてつれづれなるままに筆をとりたいと思う。

第一〇頁の表で示したように、台湾の行事は新暦で行われるものと旧暦で行われるものとが並存している。春節をはじめ、旧暦に基づく祝日は年によって月日が変わる。このため、旅行計画が立てにくく煩わしいという声も聞かれる。

現在の台湾では春節休暇を除くと祝日はわずか七日である。祝日そのものが少ないうえ振替休日制度がないことから、祝日といってもたいした有り難味はない。実際、公的機関、学校、金融機関などは休みになるが、開業医や一般商店の大部分は定休日と重ならない限り営業するので、町の様子もおおむね普段どおりである。筆者の家族も春節、元宵節、端午節、中秋節以外はいつもと変わらない。そこで、以下ではこれら四祝日を中心に説明することにしたい。なお、筆者は台湾文化の専門家ではないため素人観察に過ぎず誤解しているところがあるかもしれない。私事に関わる点とあわせて読者諸賢のご寛恕を乞う次第である。

●春　節

春節は日本の正月に相当する。勤務先によって異なるが、通常は大晦日（除夕）にあたる旧暦の一二月三一～一月三日（今年は二月一三日～一六日）までの少なくとも四日間が春節休暇となる。日本と異なり、ゴールデン・ウィークや夏季特別休暇がない台湾では、春節休暇が唯一の長期休暇である。春節前後は開業医や一般の商店も休業するので、このときばかりは台北も静かになる。春節の一週間ぐらい前から、タクシー料金、理髪料など一部サービス料金が値上がりする。タクシーの運転手はタクシー会社から車を借りて営業しているようで、事実上の自営業者らしい。自営の理容師などと共にボーナスがないため、タクシー料金や理髪料金に多少上乗せするとのことである。一般の自営業者が春節前に臨時値上げをすることはまずないので、一部サービス料金の春節前特別値上げには賛否両論がある。

日本では一月一日（元旦）が一年で最も重要であるが、台湾では大晦日が一番大切な日とみなされている。大晦日に既婚者は夫の実家で、独身者は自分の実家で春節を祝うのが習慣である。大晦日は帰省ラッシュのため交通機関や高速道路は大混雑する。そのため、大晦日の民族大移動を避け、前日（小年夜）に有給休暇をとり早々と帰省する人も多い。

筆者家族であるが、台湾の習慣に従えば日本に帰国することになるが、家族全員寒さが苦手なので日本には戻らない。代わりに義兄の家族にあわせて大晦日の夕方に愚妻の実家に行く。義母手作りの夕食を食べながら、「新年快樂」、「春節快樂」、「恭喜發財」などと言いつつ、男性陣は最初がワイン、次は高粱酒などで、全員酒を嗜まない女性陣は未成年者とともにサイダーで乾杯する。

「新年快樂」（新年おめでとう）、「春節快樂」（春節おめでとう）は日本と同じで違和感はないが、「恭喜發財」（金儲けおめでとう）はさすがに文化の違いを感じてしまう。「恭喜發財」とは景気のよい話ではあるが、日本で生まれ育った筆者は、春節早々拝金主義のようで気が引けてしまう。台湾で生活するにはまだまだ修行が足りないわけである。それはともかく、現実はどうかと言えば、義父母は既に隠居の身、義兄夫妻・筆者夫婦はうだつのあがらない宮仕え（上班族）であり、全員「發財」

行天宮お参り

という言葉には縁がない。

食事を終えたあとに、お年玉（紅包）を渡す時間が来る。台湾ではお年玉、祝い金、心づけを渡すときには赤い封筒に入れて渡す。赤い包みなので紅包である。赤は魔除けの色で縁起が良いとされており、紅包に限らず封筒などさまざまなところで赤色が使われる。お年玉は子供だけではなく父母にも渡すのが台湾の習慣である。筆者は義父、義母、義甥（義兄夫妻の一人息子）そして愚息の四人に紅包を渡すことになる。台湾では少なくとも建前上「孝順」（親孝行）が最高の道徳とされているので、親孝行の一種なのであろう。気の早い話であるが、家内に「台湾で生まれ育った愚妻が将来豚児からお年玉を受け取るのは自由だが、自分は受け取らない」、と宣言している。日本では親にお年玉を渡す習慣は一般的ではないというのが筆者の認識であるし、筆者の老父母も受け取らないからである。日本の習慣に不案内な愚妻は筆者の考えを「痩せ我慢」と曲解（？）している。曲解か否かはさておき、愚妻は将来豚児から二人分のお年玉を受け取れると皮算用し、大喜びである。さて、お年玉を渡し終わると、義父母・義兄家族・筆者家族計八人がそろった記念写真をとる。写真撮影後は、烏龍茶を飲みながらテレビを見たり雑談を楽しむ。ほろ酔い気分で味わう烏龍茶は格別美味しく、至福のひとときである。愚息が幼いため烏龍茶を楽しんだ後、すぐに帰宅する。

ちまき

春節当日は多数の人が初詣に行く。義父母、とりわけ義母が信心深い仏教徒なので、筆者家族も義父母とともに寺院を訪れる。台北では龍山寺か行天宮へ参詣する人が多い。龍山寺にいったところ、今年は台北市長が境内でお年玉を配っているところに出くわした。

春節の翌日は家族で妻の実家に戻って春節を祝うのが習慣である（回娘家）。移動するのは大変だが、大晦日は夫の実家、春節の翌日は妻の実家、ということでなかなか公平だと思う。筆者家族は大晦日を愚妻の実家で過ごしているので、この日は義父母に従って桃園県に住む義母の長兄宅に挨拶に行くことになっている。義母の両親は鬼籍に入っているため、実家を継いでいる義母の長兄宅に集まり、昼食をともにするのである。今年は雨のうえ気温が低かったので、五歳になったばかりの愚息の健康を心配した義父母の意向により、同行せず拙宅で過ごした。ちなみに天気が良かった昨年は義母の長兄夫妻・妹夫婦やその子供など総勢で二〇名強が集まり大盛況であった。

今年は春節とバレンタイン・デーが重なった珍しい年である。もともと台湾のバレンタイン・デーは旧暦七月七日の情人節なのであるが、日本の影響であろうか、若い人の間では二月一四日も人気がある。

●元宵節

旧暦の一月一五日を元宵節といい、今年は二月二八日である。元宵節の前後は各地で燈籠を掲げるので「燈節」や「上元節」とも言う。場所によっては花火を打ち上げたり、乱射するところもある。特に有名なのが台北県平渓郷と台南県塩水鎮である。平渓郷は燈籠を空に飛ばすこと（放天燈）で、塩水鎮は花火の大量乱射「蜂炮」でその名を知られ、観客は火傷をしないようにヘルメットや段ボール箱をかぶって見物する。筆者はテレビでしか見たことがないが、数万発以上の花火を乱射する映像は圧巻である。

台北市では国父（孫文）紀念館などで燈籠が飾られる。筆者家族は元宵節前日の二月二七日の夜に、国父紀念館に燈籠を見に行った。寅年にちなんで虎の形をした人形や子供に人気があるアニメの主人公の人形などを作り、その中に電球を入れ、中から照らすというものであった。国父紀念館付近の道路（仁愛路）も青色をはじめとしたイルミネーションで飾られており、幻想的な雰囲気が漂っていた。

●清明節と夫婦別姓

別名を民族掃墓日という。先祖の墓参りをする日である。墓参りは義父母がしており、今のところ筆者夫妻とは無縁である。夫婦別姓下の葬式など台湾の人々の死後の世界には興味があるし、将来に備えて詳しく知っておかなければならないことでもある。しかしながら、縁起の悪いことなので聞きづらく、義父母にも愚妻にもまだ尋ねていない。せいぜい、書籍で仕入れた知識しか持ち合わせていない。

話のついでに夫婦別姓について言及しておきたい。筆者は夫婦別姓に賛成でも反対でもないが、本場の夫婦別姓には厳しいもの、理解に苦し

台湾の主な年中行事（二〇一〇年、※は祝日）

一月　一日(金)　※開国紀念日
二月一四日(日)　※春節（旧暦一月一日）
　　西洋情人節（西洋バレンタイン・デー）
二月二八日(日)　※和平紀念日
　　元宵節（小正月、旧暦一月一五日）
三月一四日(日)　白色情人節（ホワイト・デー）
四月　五日(月)　※清明節
五月　一日(土)　※労働節（勤労感謝の日）
五月　九日(日)　母親節（母の日）
六月一六日(水)　※端午節（端午の節句、旧暦五月五日）
八月　八日(日)　父親節（父の日）
八月一六日(月)　情人節（バレンタイン・デー、旧暦七月七日）
八月二四日(火)　中元節（旧暦七月一五日）
九月二二日(水)　※中秋節（旧暦八月一五日）
一〇月一〇日(日)　※国慶日
一〇月一六日(土)　重陽節（重陽の節句、旧暦九月九日）
一二月二五日(土)　聖誕節（クリスマス）

む点がある。筆者家族は夫婦別姓、父子同姓で、筆者と愚息が岡崎姓（愚妻の戸籍上は平姓）、家内は黄姓である。夫婦別姓が持つ冷酷な側面を痛感させられるのは豚児に関係するときである。義母や愚妻からよく「他是你的兒子」（彼はお前の子供だ）と言われる。その理由を愚妻に言わせると、「他姓平、不是姓黄」（平姓であって黄姓ではない）からである。わが子といえども姓が違えば本質的には他人という発想が見え隠れする。黄姓の愚妻と岡崎姓（平姓）の筆者および豚児の間には越えられない線が引かれているのであろう。筆者はこの考えにはついていけないが、「孝順」の建前上義母に意見するのを控えており、愚妻に対してのみ「他是我的兒子、也是你的兒子」（自分の子供であり、お前の子供でもある）と主張することにしている。

愚息を筆者の子供と言う一方で、その愚息が小籠包を食べたいと言うと、大雨が降っていようとも時間を厭わず、美食として日本でもおなじみの「鼎泰豐」の本店まで買いに行き長蛇の列に加わる。このあたりの心理は専門家ではない筆者にはよくわからないが、いろいろ言いながらもやはり母親だな、と安心できるときでもある。愚息は台湾で育っているため、中国語が母語である。それゆえ台湾の人々とのコミュニケーションの方が容易であることも手伝って、筆者よりも愚妻や義父母になついている。愚妻は、豚児は異姓ではあるが夫より自分の方に近い存在、と考えているのかもしれない。

●奇妙な労働節

五月一日は労働節で、日本の勤労感謝の日にあたる。とは言うものの「勤労感謝の日」とは似て非なる祝日である。一般の公務員は休みにならないし、大学をはじめとする学校の教職員も通常通り勤務する。教師は授業をする必要があるし、学生も通学しなければならない。台湾では公務員や大学を含む学校の教職員は労働者の範疇には入らないらしい。年金などで信じられないほどの厚遇を受ける公務員（国公立学校の教職員および職業軍人を含む）が労働者でない、というのならまだ理解できる。公務員に比べて福利厚生が格段に劣る私立学校の教職員が休みにならないのは公務員の道連れにされているようで、いささか妙な気分になる。労働節とは別に教師に感謝する教師節（今年は九月二八日）があることにはあるが、祝日にされている

龍山寺額

わけではない。労働節は日本と台湾の発想の違いがよく現れている、おもしろい祝日である。

普通の意味での行事ではないが、五月には一大イベントが実施される。所得税の申告である。台湾には年末調整という制度がなく、給与所得者も納税申告をしなければならない。納税額の計算は面倒であり、それをさせられる筆者にとって五月は頭の痛い月である（台湾の納税については、『アジア研究所所報』亜細亜大学、第一三五号、の拙稿を参照されたい）。

●端午の節句と台湾版バレンタインデー

今年の六月一六日（旧暦五月五日）は端午の節句である。「端午の節句」＝「子供の日」の日本と異なり、台湾では中華粽を食しながら古代中国の詩人屈原を偲ぶ（ことになっている）。日本の粽はおやつのようなものであるが、中華粽はおむすびのような存在であり、美味とは言え珍しいものではない。屈原先生のお蔭で休みにはなるが…、といったところであろうか。

八月一六日（旧暦七月七日）は七夕である。同じ七夕でも台湾ではバレンタイン・デーとなる。星に願いを、という日本の七夕も台湾の七夕もどちらもロマンチックであるが、台湾の方が現実的である。筆者の見るところ、男性が女性に贈り物をする方が圧倒的に多い。中には大金をはたいて彼女にバラの花を何十本も送る男性もいる。巷間言われているように、台湾では女性が強いのであろう。余談であるが、筆者の場合、台湾版バレンタイン・デーに加えて、三月一日（愚妻の誕生日）、五月第二日曜日（母の日）、七月七日（結婚記念日）、クリスマス・イブにはケーキなどを愚妻にプレゼントするか食事に招待する。仕事の傍ら愚息の面倒をみている愚妻に対する感謝が第一義であるが、祟りや後難を恐れて、という面がないわけでもない。おそらく一般の台湾男性も同じであろう。

旧暦の七月（今年は八月一〇日から九月七日）は鬼の月ということで禁忌が多く、結婚と転居を控える人が多い。気にしない人は気にしないのであるが、意に介する人が多数派のようだ。

●中秋節と台風休暇

中秋節の夜は満月で、月餅を食べるのが習慣である。月餅を職員に配布する会社や学校も多い。筆者も勤務先から月餅を受け取る。月餅はカロリーが比較的高いため、愚妻どころか豚児にまで揶揄されているメタボ親父の筆者はそのまま義父母に渡すことにしている。受け取った月餅を義父母がどうしているのかは、筆者の与り知らぬところである。

最後に、年間行事とは関係ないが、日本ではめったにない台風休暇について述べておこう。台湾では台風が近づくと公的機関や学校などが臨時休暇となることがある。翌日が休みになるかどうかは、午後一〇時までにテレビ等で報道される。中央政府直轄市、政令指定都市、県を基本単位として、勤労者に対しては「上班」（出勤）あるいは「停班（不上班）」（休暇）で、学生に対しては「上課」（通学）もしくは「停課（不上課）」（休校）で示される。民間企業については各企業の判断に任されているようである。筆者のように居住している県市と勤務（通学）している県市が異なる場合は期待と不安が交錯する。居住地で「停班」、「停課」となっても勤務先や通学先のある県市が「上班」、「上課」であれば、大雨や強風のなか出勤（通学）しなければならないからである。

以上、気の向くままに台湾の年中行事を紹介した。筆者は台湾で祝日を迎えるたびに、労働密度やストレスの程度はともかく、台湾の人々は働きすぎ、休暇の多い日本が羨ましく感じるとともに、日本人はこんなに休んでいて大丈夫だろうか、とも思う。

（おかざき　こうじ／中華大学人文社会学院）

龍山寺山門